

全国調査との比較にみる本学学生のスポーツ経験と意識に関して

中原 雄一* ・ 池田 孝博**

要旨 公益財団法人全国大学体育連合が会員校を対象に、「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」を実施し、本学もこの調査に協力をした。そして、この全国調査の結果をもとに本学の結果と比較し、本学学生のスポーツ経験と意識について検討した。

その結果、本学の学生は「する」スポーツと「みる」スポーツに関して全国の学生と比べ興味・関心が低く、「ささえる」スポーツに関しては、経験は少ないものの、興味・関心は高いことが明らかとなった。また、2020年に開催されるオリンピック東京大会については、本学学生の興味・関心は全国の学生と比べ低く、パラリンピック東京大会については、全国の学生と同程度の興味・関心を持っており、特にパラリンピック東京大会のボランティアについては、全国の学生よりも若干高い割合で興味・関心があることが示された。

キーワード 大学生、スポーツ、ボランティア、オリンピック・パラリンピック

はじめに

文部科学省は、2010年（平成22年）に、スポーツ立国の実現に向けて必要となる施策の全体像を示す「スポーツ立国戦略」を策定した。そこでは、スポーツ立国戦略の目指す姿を実現するために、「人（する人、観る人、支える（育てる）人）の重視」が基本的な考え方の1つとして掲げられている¹⁾。その後スポーツ基本法が施行され、スポーツ基本法に基づきスポーツ基本計画の策定が進められ、現在は、第2期スポーツ基本計画が進行中である。第2期スポーツ基本

計画では、スポーツ政策としてスポーツを「する」「みる」「ささえる」といった多様な形での「スポーツ参画人口」を拡大し、スポーツ界が他分野との連携・協働を進め、「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むことが示されている²⁾。

このようなことを背景に、公益財団法人全国大学体育連合（大体連）は、会員校を対象に「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」を実施し、在学生在がどの程度、日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画しているのかについて調査を行い³⁾、本学もこの調査に協力をし

* 福岡県立大学人間社会学部・講師

** 福岡県立大学人間社会学部・教授

た。そこで、全国調査の結果と本学の結果を比較し、本学学生のスポーツ経験と意識について検討した。

方法

大体連が会員校に調査協力を依頼し、それに応じた全国の大学・短大が大体連の提示するwebアンケートを用いて、学生に回答を依頼するという方法にて、2016年（平成28年）9月1日から11月16日の間に調査が行われた。本学もこの調査に協力することとし、健康科学実習Ⅱの受講生を対象に、初回オリエンテーション時（10月第2週）に回答を依頼した。対象者には、本調査への協力は自由意志であり、回答しない場合にも成績評価には一切影響することなく、なんら不利益を被ることがない旨を十分に説明した。回答はスマートフォンにて行い、回答データは大体連に直接送られることになっていた。そのため、本学教員が回答時点で結果等を知ることはなく、本学分のデータが大体連より後日まとめて送られてきたものを、今回の分析に用いた。なお、分析対象は1年生のみとし、本学における有効回答数は240名であった。本学も含めた全国の調査協力数は14大学・2短大、回答者数は5,861名（1年生：4,173名、2年生：953名、3年生：428名、4年生：307名）であった³⁾。

結果ならびに考察

1. 「する」スポーツについて

1-1. 最近1ヶ月間の運動・スポーツへの取り組みについて

「週2回以上かつ6ヶ月以上」運動・スポー

ツを継続している学生の割合は、本学は11.3%であったのに対し、全国は33.1%と20%以上も違いがあった。一方、「最近1ヶ月間運動・スポーツを行っておらず、これから先もするつもりがない」者の割合は、本学が22.9%であったのに対し全国は16.0%であり、本学学生は運動・スポーツをすることについて、後ろ向きの学生が多いことが明らかとなった（図1-1）。運動・スポーツを多く実施していることが予想される体育・スポーツ系学部・専攻の学生が全体で8.5%程度含まれていることから、全国調査の結果は、少なからず影響がある可能性も否定できない。しかし、第2期スポーツ基本計画ではスポーツ実施率の向上を掲げており、そこでは成人の週1回以上のスポーツ実施率が65%程度となることが目標とされている²⁾。本学学生において、「運動をしているが週2回未満」、「週2回以上運動をしている（6ヶ月以内、6ヶ月以上継続）」のすべての割合を合わせても47.9%であり、国の掲げる目標値までには開きがある。本学では2年次以降は体育実技（本学における健康科学実習）が行われないことから、運動やスポーツをサークル等で実施する人と全くしない人の二極化が進むことが容易に想像できる。さらに年代別で見ると、若年層は高齢者と比較して、週1回以上の運動・スポーツの実施率が低いことも報告されていることから⁴⁾、体育実技が行われる大学1年次に、運動・スポーツをすることの重要性の理解と習慣化が必要であり、本学における健康科学実習の果たす役割は非常に大きいと思われる。

1-2. 運動・スポーツを継続的に行っていた学校時代

学校での部活動をはじめ、スポーツ少年団や

民間のスポーツスクール、地域でのスポーツ活動など運動・スポーツを継続的に行っていた学校時代は、本学は「小学校時」63.8%、「中学校時」64.2%とどちらもほぼ同じくらいの割合であったが、全国は「小学校時」72.6%、「中学校時」79.1%と中学校時が最も高かった。また、「小学校時」「中学校時」のどちらにおいても、運動・スポーツを継続的に行っていた割合は、本学は全国よりも低かった。さらに、本学は「高校時」32.1%と、運動・スポーツを実施する割合は急激に低下し、全国の「高校

時」64.6%と比較しても、半数近くの割合しか運動・スポーツを実施していなかったことになる。「大学時」は、本学は32.1%に対し全国は38.1%と、「高校時」と比較し差は縮まっている。一方、運動・スポーツを継続的に行ったことが「一度もない」と答えた割合は、本学は16.7%であったのに対し全国は7.5%であり、本学は小学校時から現在まで、運動・スポーツを継続的に行った経験が少ない学生が多いことが明らかとなった(図1-2)。1-1における運動・スポーツへの取り組み状況からみても、本学の

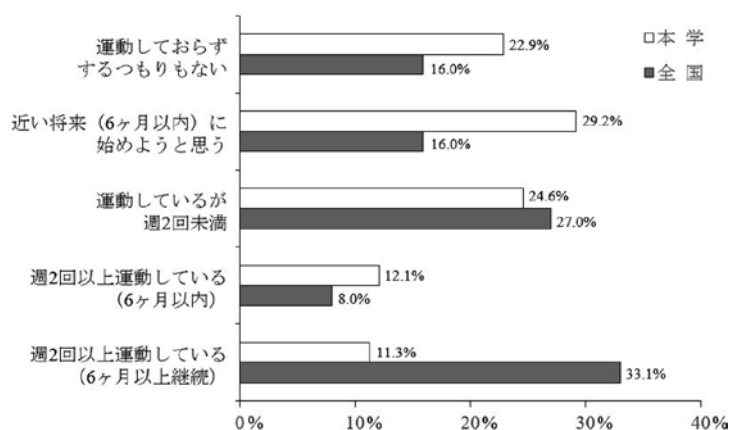


図1-1. 最近1ヶ月間の運動・スポーツへの取組状況

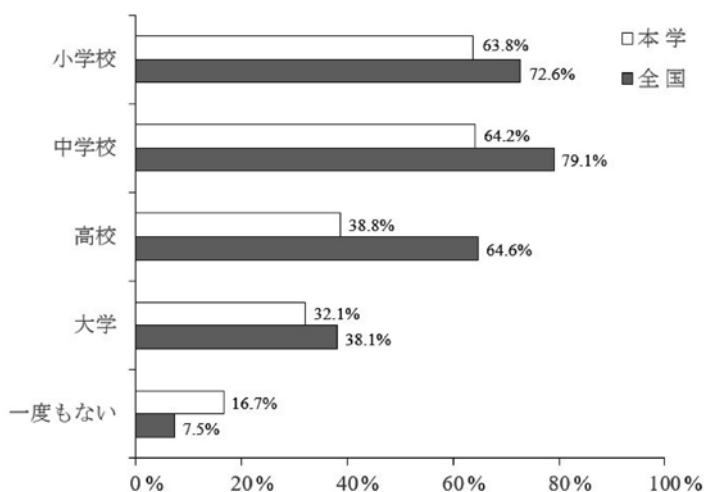


図1-2. 運動やスポーツを継続的に行っていた学校時代

学生は全国の学生と比べ、これまでの運動・スポーツ経験が乏しく、運動・スポーツに取り組む意識が低いという結果につながっていると推測される。過去の運動・スポーツ経験が乏しいと、運動・スポーツの取り組み方もわからず、結果として運動・スポーツをすることのハードルも高くなることが予想される。運動・スポーツを生涯にわたり実施することは健康の維持・改善にもつながることから、運動・スポーツをすることに対する意識が低い学生に対し、意識付けはもちろん、運動・スポーツの取り組みを実践できるような仕掛け作りが重要であると思われる。

2. 「みる」スポーツについて

2-1. 過去1年間において実際に観戦・鑑賞したスポーツの種目

過去1年にスポーツを観戦・鑑賞の経験がある学生は、本学では62.1%であったが、全国では78.1%と8割近くにもものぼっており、「みる」ことに関して全国と比較して意識が低いことが明らかとなった(図2)。また、スポーツ観戦・鑑賞経験のある学生を対象に、そのスポーツ種目を尋ねたところ、本学は「野球」(49.7%)が最も多く、次いで「サッカー」(24.2%)、「バスケットボール」(16.8%)となっており、上位3種目は全国と同一であった(表2-1)。この上位3種目は日本でもプロスポーツ組織があり、多くの試合が開催されていることから目にする機会が多いかもしれず、特に本学がある福岡県は上位3種目全てにおいてプロの本拠地があり、テレビ等メディアを通してだけでなく、実際に何かの機会に会場に足を運ぶ可能性も考えられる。特に、野球は全国と比べても割合は高く、福岡という地域性が大きく影響しているのかも

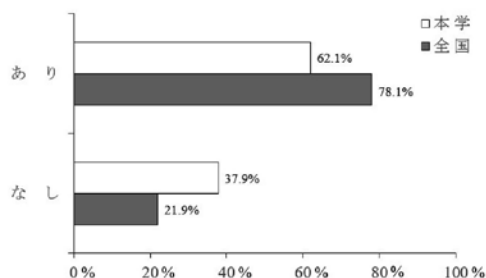


図2. 過去1年間のスポーツの観戦・鑑賞経験

表2-1. 過去1年間に実際に直接観戦・鑑賞したスポーツ種目

種目	本学 (%)	全国 (%)
野球	49.7	46.6
サッカー	24.2	29.5
バスケットボール	16.8	13.6
バレーボール	12.8	10.0
ダンス	12.8	8.3
陸上競技	8.7	11.6
マラソン・駅伝	6.0	9.1
ラグビー	4.0	5.5
水泳	3.4	5.7
フェギューアスケート	3.4	2.3
大相撲	2.0	2.1
障害者スポーツ	1.3	1.4
剣道	0.7	3.0
柔道	0.0	2.8
ゴルフ	0.0	1.4
その他	7.4	9.2

しれない。

2-2. 直接観戦・鑑賞したいスポーツの種目

直接観戦・鑑賞したスポーツ種目では、本学、全国ともに「野球」が最も多く(本学:55.8%、全国:46.2%)、割合も本学の方が全国と比較しても高く、観戦・鑑賞したスポーツ種目と同

様の結果となった（表2-2）。at home VOX 調べによると、福岡ソフトバンクホークスは本拠地支持率が86.7%と高く、次いで佐賀県、長崎県の支持率が高いことが示されている⁵⁾。本学は、福岡をはじめ九州各県からの進学者が多いことから、このような結果に結びついたのではないかと考えられる。

2位以下のスポーツ種目では、本学は「バレーボール」(44.2%)、「フィギュアスケート」(39.2%)、「バスケットボール」(34.6%)、「サッカー」(33.3%)の順になっており、全国は「サッカー」(45.6%)、「バレーボール」(31.2%)、「バスケットボール」(29.9%)、「ダンス」(18.8%)と、若干異なっている(表2-2)。特に、本学は「フィギュアスケート」が39.2%と全国の18.4%と比べて多い傾向がみられた。全国調査では、「バ

レーボール」や「フィギュアスケート」、「ダンス」など審美系競技に女性の関心が高いことが示されているが、本学学生は女性が多いことから、「バレーボール」や「フィギュアスケート」の割合が高くなっていることが考えられる。さらに、特筆すべき項目として、「障害者スポーツ」への興味・関心が挙げられる。本学では13.8%の学生が興味を示しているのに対し、全国では6.7%と少ない(表2-2)。本学は福祉系を中心とした大学であり、さらに本学の隣市で行われる車いすテニスのジャパンオープン(飯塚国際車いすテニス大会)にボランティアで参加する学生が毎年いることなどの要因があるのかもしれない。一方、直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目が「特になし」と回答した学生は本学、全国とも同じ割合であり、全国と比べて「みる」スポーツに興味・関心が特に低いというわけではないと思われ、「する」スポーツとは異った傾向が示された。

表2-2. 直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目

種目	本学 (%)	全国 (%)
野球	55.8	46.2
バレーボール	44.2	31.2
フィギュアスケート	39.2	18.4
バスケットボール	34.6	29.9
サッカー	33.3	45.6
ダンス	30.0	18.8
水泳	16.3	13.6
障害者スポーツ	13.8	6.7
ラグビー	9.2	14.5
陸上競技	8.8	16.3
マラソン・駅伝	6.7	13.6
剣道	5.8	6.0
柔道	4.6	6.4
大相撲	2.9	8.1
ゴルフ	0.8	2.6
その他	7.1	10.0
特になし	7.9	7.8

3. 「ささえる」スポーツについて

3-1. 過去1年に経験したスポーツ・ボランティアの状況

過去1年間にスポーツ・ボランティアを経験したことがある学生は、本学では27.1%であったが、全国は42.1%と大きな開きがあった。また、本学で最も多かった経験は、「大会・イベントの運営や世話」(12.1%)であったが、全国では「スポーツの審判」(18.9%)が最も多く、次いで「スポーツの指導」(15.6%)、「大会・イベントの運営や世話」(14.7%)となっており、本学との違いが顕著であった(図3-1)。このような違いがみられた理由は本調査のみではわからないが、スポーツの審判や指導は、それなりのスポーツ経験も必要であることが予想され、

本学学生のスポーツ経験の乏しさが影響している可能性も考えられる。

3-2. やってみたいスポーツ・ボランティアについて

スポーツ・ボランティアの過去1年の経験では、全国の学生に比べ本学の学生の割合は少なかったが、「何かやってみたい」という学生は、本学は60.4%と全国の57.2%と比べ多かった。特に「大会・イベントの運営や世話」をやってみたいという本学学生は50.8%と、半数以上の学生がやってみたいと思っており、「する」スポーツとは大きく違い、興味・関心をもって

ることがうかがえる。一方全国では、やってみたいスポーツ・ボランティアとして「スポーツの指導」(25.4%)が2番目に多いが、本学は9.6%と一番低く、やはりスポーツ経験の乏しさが影響していることが推察される(図3-2)。

3-3. スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由

できない理由として、全国では「時間がない」が37.6%と最も大きな理由になっているが、本学では、「時間がない」(32.9%)他、「情報が手に入りにくい」(34.6%)、「会場が遠い」(30.0%)と3項目が同程度の割合になってい

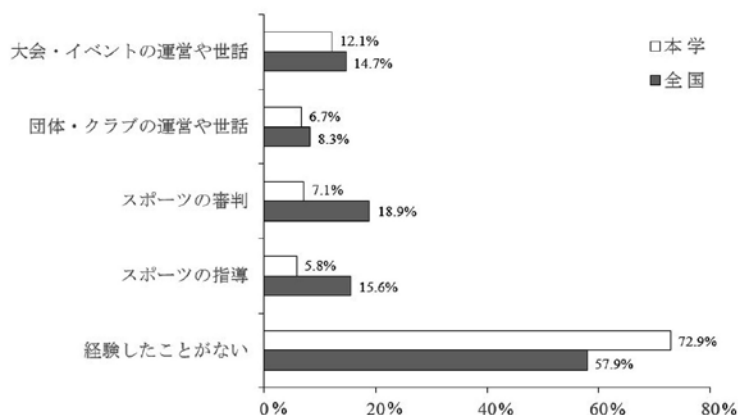


図3-1. 過去1年間に経験したスポーツ・ボランティア

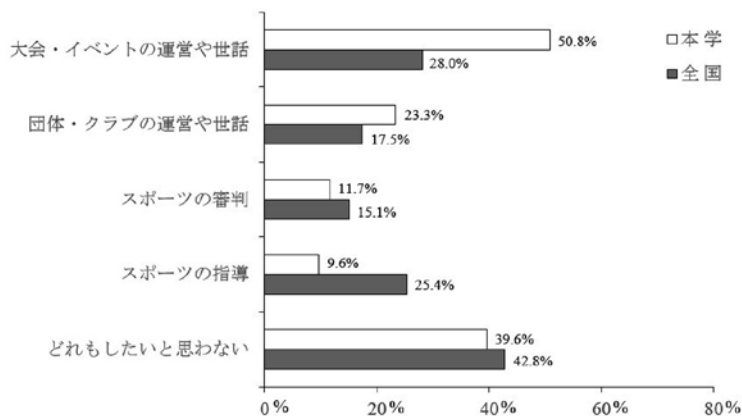


図3-2. やってみたいと思うスポーツ・ボランティア

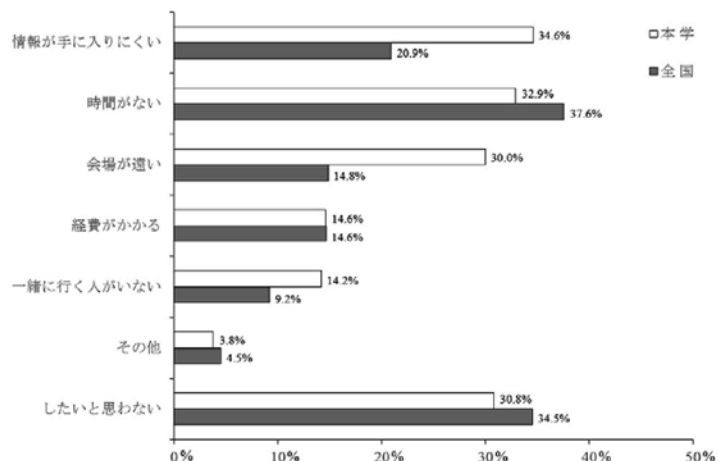


図3-3. スポーツ・ボランティアをできない理由

る(図3-3)。会場が遠いことに関しては、本学の所在地の問題があると思われる。1人暮らしの学生の場合を考えると、大学周辺でスポーツイベントが開催されることは少なく、特にプロスポーツの試合や大きなスポーツイベントとなると、福岡市や北九州市など大きな都市で行われることが多く、会場まで片道1時間以上はかかる。そうなると、ボランティアは朝早くから行動をすることも多いため、なかなか参加できないことも考えられる。また、会場が遠いと時間だけでなく費用もかかることも予想され、学生にとっては負担が大きいかもかもしれない。一方、情報が手に入りにくいことに関しては、メディアを活用することはもちろん、大学側にも随時情報が入るシステムが構築されると、学生にも広く伝わりやすくなるのではないかと思われる。

本学には、社会貢献・ボランティアセンターがあることから、ボランティアに興味・関心を持っている学生が多いと思われるが、過去1年間に経験したスポーツ・ボランティアの経験と照らし合わせると、開きが多い。ボランティア

の阻害要因として、時間の問題のみならず、情報入手や開催場所の問題等、多くあることは事実であるが、興味・関心のある学生を興味・関心があるだけにするのは非常にもったいないと感じる。また、スポーツ・ボランティアといってもスポーツ経験は必ずしも必要ではなく、その内容も多岐にわたることから、まずはスポーツ・ボランティアというものを知ってもらうことが大切だと思われる。

4. オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)について

4-1. オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)の観戦について

2020年に開催されるオリンピック東京大会(以下オリンピック)を直接観戦したいかどうかについて、本学は「そう思う」37.1%、「ややそう思う」29.2%で、合わせて66.3%が直接観戦したいと回答した。一方、全国は「そう思う」50.4%、「ややそう思う」23.1%と合わせて73.5%が直接観戦したいと回答し、開きがあることが分かった(図4-1)。また、パラリンピッ

ク東京大会（以下パラリンピック）を直接観戦したいかどうかについては、本学は「そう思う」21.3%、「ややそう思う」30.4%、合わせて51.7%であり、全国は「そう思う」27.4%、「ややそう思う」25.5%、合わせて52.9%であり、パラリンピックの方が全国との開きが少なかった（図4-2）。しかし、本学、全国とも、パラリンピックよりオリンピックの方が興味・関心が高く、どちらの大会においても、全国の学生よりも本学の学生の興味・関心が低いことが示された。オリンピック・パラリンピックの開催地である東京では、多くの関連イベントが実施されている他、繁華街ではオリンピックやパラリンピックのエンブレムやロゴを見る機会も多く、さらに、地方も含め規模の大きな総合大学や体育系大学などでは、オリンピックを輩出するなど、オリンピック・パラリンピックに触れ

る機会も多いと思われる。しかし、本学はそういった環境にないため、オリンピックやパラリンピックに触れる機会も少なく、結果として、オリンピック・パラリンピックに興味・関心が高まっていないのが現状であると思われる。

4-2. オリンピック・パラリンピック東京大会（2020年）でのボランティアについて

オリンピックでボランティアをしたいかどうかについて、本学は「そう思う」19.6%、「ややそう思う」27.1%で、合わせて46.7%が「ボランティアをしたい」と回答した。一方、全国は「そう思う」25.3%、「ややそう思う」23.3%と合わせて48.6%が「ボランティアをしたい」と回答し、オリンピックにおけるボランティア希望は、本学と全国で同じような割合であった（図4-3）。また、パラリンピックについては、本学は「そう思う」17.9%、「ややそう思う」27.1%、合わせて45.0%であり、全国は「そう思う」20.7%、「ややそう思う」22.3%、合わせて43.0%であり、本学の学生はパラリンピックのボランティアについて、全国の学生よりも興味・関心が高いことが明らかとなった（図4-4）。

オリンピック・パラリンピックのボランティアは、大会期間中のみならず、大会前の事前キャンプなどにおいても必要とされる。本学の所在地である福岡県田川市は、オリンピック・パラリンピックに向け、ドイツを相手国としてホストタウンの登録申請を行っており、事前キャンプが見込まれる。こういったことを契機にオリンピック・パラリンピックに興味・関心を持ち、多くの学生がボランティアに積極的に参加することが期待される。

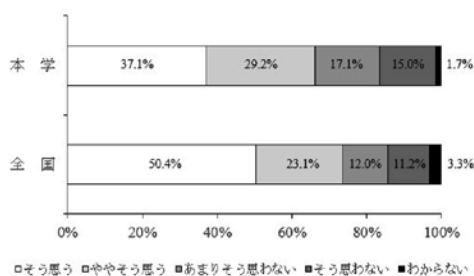


図4-1. オリンピック東京大会の直接観戦の希望

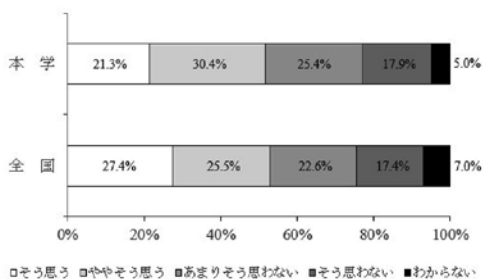


図4-2. パラリンピック東京大会の直接観戦の希望

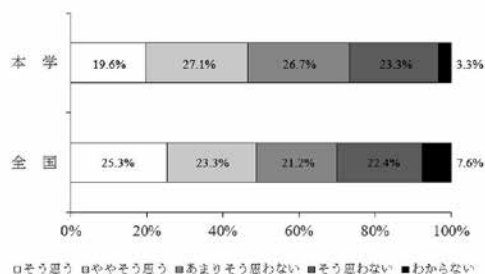


図4-3. オリンピック東京大会のボランティア希望

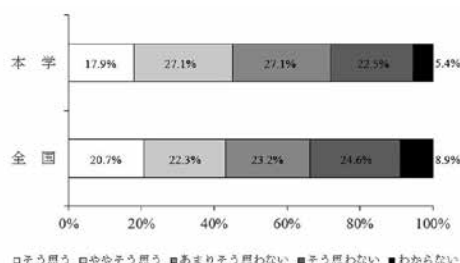


図4-4. パラリンピック東京大会のボランティア希望

総括

本報告では、大体連が行った調査をもとに、全国の調査結果と本学の調査結果を比較し、本学学生のスポーツ経験と意識に関して検討した。その結果、本学学生は「する」スポーツと「みる」スポーツに関しては、全国の学生と比べ興味・関心が低く、「ささえる」スポーツに関しては、経験は少ないものの、興味・関心は高いことが明らかとなった。また、オリンピックについては、興味・関心が低く、パラリンピックについては、全国の学生と同様の興味・関心を持っており、特にパラリンピックのボランティアについては全国の学生よりも若干高い割合で興味・関心があることが示された。

オリンピック・パラリンピックの前には、2019年ラグビーワールドカップや2021年ワー

ルドマスターズゲームズなど、多くのスポーツ国際競技大会が日本で開催される予定である。また本学のある福岡でも、ラグビーワールドカップの一部試合や、2021年には世界水泳選手権が開催されることから、実際にスポーツ・ボランティアの活動に参加することはもちろん、これらスポーツ国際競技大会を契機に、「する」「みる」スポーツに興味・関心を持ち、様々な形でスポーツ活動に関わることが期待される。一方、オリンピックは授業期間内に開催されることから、大学側としても何らかの配慮が必要であろう。

参考文献

- 1) 文部科学省. スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン—. (2010).
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/09/16/1297203_02.pdf
- 2) 文部科学省. スポーツ基本計画. (2017).
http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf
- 3) 公益財団法人全国大学体育連合. 大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告書. (2017).
- 4) 文部科学省. 地域スポーツに関する基礎データ集. (2015).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingichousa/sports/025/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/05/01/1357467_4.pdf
- 5) at home VOX. プロ野球12球団、応援率が高い都道府県は？地元密着ナンバー1はココ！. (2014).
<https://www.athome.co.jp/vox/town/10736/pages2/> (2017.11.01.閲覧)